平成12年3月31日

郷土あきる野　第8号

発行　あきる野市教育委員会　東京都あきる野市二宮350　電話 042-558-1111　FAX 042-550-3451

名産黒八丈

坂上洋之
（あきる野市文化財保護審議会委員）

はじめに

「すしは昔、すしナと言う魚を御飯で発酵せしものなり。（略）嘉永・安政の頃、（すしや　すーし）と粋な声で売り歩く若者あり。その行装は、吉原冠に松原木綿の尻端折、黒八丈のつけた半てん、黒の股引に白足袋、麻裏草履という拵にて（略）イキとかイナセとかその時代の風俗の代表的なものにして、特に婦女には人気の有りしものなり」

これは、都心のある寿司屋に掲げてあった額文の一節です。

また、こんな話も伝わっています。

幕末に長州征伐があって、秋川筋某村の千人同心も将軍供奉の一人として京都に行った折、島原の遊廓に登楼したそうです。敵娼の丸帯の色具合が、いかにも黒八丈らしかったので尋ねたところ、「これは、五日市どすえ」との返答で、郷土の産物の販路の広さに、いたく感じ入ったということです。

黒八丈とは黒色に染められた絹織物で、江戸時代後半頃から主に秋川・平井川流域、及び多摩川流域の一部で製造され、幕末から明治・大正・昭和初期までは、「五日市」という別名をも称せられて、比較的高級な織物の一つとして全国的に販路を拡大した、あきる野の代表的な伝統産業製品の一つです。

ところで、秋川流域での伝統産業の双璧は軍道紙（大幡紙）と黒八丈の生産でした。二つとも、近年ほとんど衰微してしまいましたが、かっては、前述のように隆盛の時代もあったのです。本稿では、すでにほとんど過去のものになってしまった黒八丈の歴史などについて、若干の考察を加えてみたいと思います。

黒八丈の羽織

1. 起　源

◇夫婦けんか

黒八丈の起源として最も巷間に伝わる話に、昔大久野村幸神で、農間稼ぎに機織りを営む夫婦のけんかが元だ、というのがあります。けんかがエスカレートして、悔しさのあまりおかみさんは、織りかけの白絹を家の前の泥田に投げ捨ててしまいました。

翌朝、けんかもおさまり、投げ捨てた白絹が惜しくなっておかみさんは、泥田から布を拾い出して川で濯ぎましたが、白布には戻らず黒色に染まっていました。これをヒントに夫婦は工夫を重ねて、黒八丈を完成させたという話です。

この話の真偽はともかく、これにはある偶然の出来事と、その土地特有の条件とがうまく重なって黒染めが創出されたという、一つの可能性が示されているように思われます。

◇八丈織物との関係

黒八丈の名が示すように、八丈島で古来より生産されてきた絹織物（本八丈）に源流を求める考え方も出来ます。

本八丈には黄八丈、樺八丈、黒八丈があり、江戸時代には年貢として幕府に貢納され、江戸市中でも取引されました。『八丈実記』によれば、黒染めは椎の木の皮の煎汁と、古田の泥土とに幾十度となく漬けて染め上げるとあります。

また『七島日記　上』の寛政8年（1796）5月15日の記述に「染色は黒、とび、黄の三色にかぎる。（中略）黒は椎の皮にて染める。（中略）さればこそ幾度あらいすゝぎても、いろのかわる事なし。さていつのころより、むさしの八王子、かみつけの桐生あたりより八丈縞とて織り出す、よく八丈の産に似たれども染めやうの異なる故、ひととせをまたずして色かはる。」

こうして見てみると、少なくとも寛政期以前から八王子や桐生でも、本八丈に似た黒染めの絹布生産をしていたことが分かります。ただし、この「八王子」を今の八王子市域と限定しない方がいいと思います。当時は生産物市場が八王子にあり、八王子千人同心の本拠地でもあった関係などから、秋川流域もおしなべて「八王子」と広く包括して呼ばれてしまう場合が多かったのです。

秋川流域の村々に残された文書（村明細帳）に、農間稼ぎとして女性が紬を織り出すという記事が見られる上限は、今のところ享保元年（1716）からです。当時すでにこれらの紬を黒染めにしていたかどうかは不明ですが、本八丈が江戸期以前からの産物で、広く知られていたために、秋川流域で始まった紬生産も、黒染めにして出荷した方が付加価値が格段に違うということで、これを真似るようになったのではないでしょうか。そしてその時期も、恐らく享保期に近いあたりまで遡れるのではないかと考えられます。

2. 黒八丈の盛況

さて、黒八丈という名称が村明細帳などに見えてくるのは文政期頃からで、享保期からだと約1世紀の隔たりがあり、この間の推移は定かではありません。

文政6年（1823）完成の『武蔵名勝図会』の巻九に、「産物　織物　八丈黒無地　諸色帯地　縞島　青梅縞　其外種々　平井大久野伊奈より多く出す」とあり、文政11年（1828）の網代村明細帳に「女は蚕を養い黒八丈紬太織等織立」、天保9年（1839）の川崎村（現羽村市川崎）明細帳には「女は青梅縞黒八丈織出申候」、天保14年（1843）の熊川村（現福生市熊川）明細帳にも「女は青梅嶋黒八丈織出申候」とあります。

さらに、安政2年（1855）の秋川流域36ケ村の村明細帳中、18ケ村に黒八丈織り出しが記載されています。

これらのことは、黒八丈の評判がよくて、女性の農間稼ぎの主流を占めるほどの盛況が、文政期あたりから定着したことを示しているように思えます。その範囲も秋川流域にとどまらず、多摩川流域まで広がっています。

安政2年の舘谷村明細帳の「蚕其外所名産黒八丈織出し」という表記にも、黒八丈への自負を伺うことができるでしょう。

また、嘉永7年（1854）に五日市村上宿の土屋翁が書いた「黒八祖栄集」にも「近年流行之黒八丈、五日市本場と唱、世上に弘る事、三ケ都は云に不及、津々浦々迄評判たる事、広大也」などの記述が見られます。

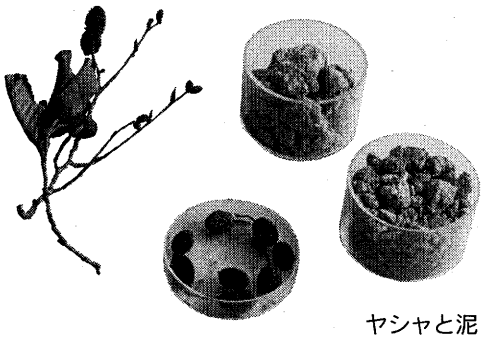
「コクのある、どす黒い味のある、滑らかで腰のある、万代変色しない」とか、あるいは「雅の渋さと黒の美、素朴であって渋く、それだけに触手の味は素晴らしく、時代の真実さ人間の誠を感じさせるに足る感覚」（田村活三「絹織物黒八丈について」『秋川市史研究第2号』より）といった優れた特性が評判を呼び、製品は主に八王子市場を通じて全国的に販売されていきました。冒頭の京都島原のエピソードも、そうした中から生まれたものと言えましょう。

その用途は、武士の下着、羽織の帯、袴、婦人着物の袖口、半襟などで、明治以降にはさらに帽子、ネクタイ、喪章、畳の縁、肩掛けなどにも用いられました。

3. 製　法

黒八丈は絹織物の一種で、原材料の生糸は、江戸時代にあっては養蚕による農家の自家生産品で、いわゆる農

間稼ぎとして、女性が座繰と称する器具で繭から糸をとり、それを黒色に染めてから機にかけ、布にするのです。



ヤシャと泥

◇染色原料

黒色に染める方法は、前述の『八丈実記』では、椎の木の皮の煎汁と古田の泥に漬けてとありますが、秋川流域などではヤシャブシの実を主に利用しました。ヤシャブシ（夜叉五倍子）は、カバノキ科の落葉小高木で、山地に自生し、実は褐色の染料に供します。（『広辞苑』）。中にはタンニンが含有していて、泥土中の鉄分と化合して黒色に染まるのです。

だから、染色には鉄分が豊富に含んだ土が必要ですが、そのような土は、秋川や平井川流域のあちこちからとれました。前述の「黒八祖栄集」には、「太子堂（五日市村権田）の北方にある小倉山から採取したのがそもそもの始まりだ」とあり、「此頃の土とり女子ハ伴を求て粧ひかざり、かき集たる土を小桶に入置、芝地に腰をのせて、相坂之関の清水に手足をそそぎ、くくりあげたるひもとき、蹴出し前掛引きのばし、桶をさげ歩行を揃て時之流行の唄をうたゐ、八瀬や小原にまがふる風情なり」と、やや現実離れのした土とりの様子が描かれています。

また、天保4年脱稿の『桑都日記　続編』では「黒土、秋川の南岸、留原村これを出す。糸を染むるに宜し。是の辺の村々黒八丈縞を織る者、総て是の土を用ふ。」としています。

明治以降では、大久野村の田からとれるものが最も良質で、採取条件も良かったように思えます。前出の田村氏によれば、田の表面から約2m下に粘土質の青色をした鉄分含有の豊富な地層があって、その土を用いたということです。この土（土地の人は、でろ（泥）といった）を売る人（泥屋）も、1村に1、2人いたそうです。

田村氏によれば、「大久野村では玉ノ内越路坂下の田・相沢沖の田・ゼンダナ・幸神の田・落合の田・菅窪の田ー慶徳寺山、外に平井村足下駄滝の入、五日市留原一帯の田、増戸村伊奈の田、西秋留村引田三ノ谷釜の口（川口分）」が主な泥産地でした。

前に戻って、ヤシャブシの実は明治以降では、甲州や伊豆地方から入荷しました。近くでは小曾木や成木方面からもありました。

◇製造工程

黒八丈は下記の7工程を経て出来上がります。

①製糸……糸をとる、糸をひく
②撚糸……糸を撚（縒）って、経糸、緯糸にする
③機を経る（整経）……経糸、緯糸を揃え整える
④染色……糸を染める
⑤機裂き……野外に杭を立て、経糸の全長を決めて干す
⑥機織（機脚）……布に織る
⑦畳む……1疋（2反（約22m））に仕上げて畳む

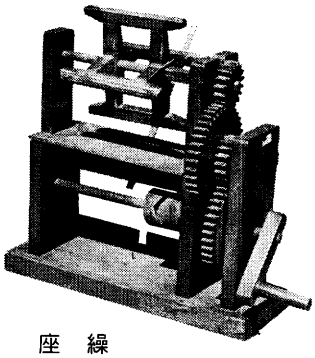
（田村活三氏による）

この中の④の染色に黒八丈の特色があるわけで、③までの工程を経て整経された生糸を釜でゆでます。これは、繭の中に含有するセシリン、蝋質、脂肪質、鉱物質、色素などが、ゆでることにより除去されて、手触りも柔らかく光沢のある糸になるからです。

次に、盥のような容器に茶褐色の煎汁に泥土を溶かし入れ、この中に原料糸を漬けて数時間放置し、その後、

川に運んでよく濯ぎます（糸サワシ）。これを1日に2回、仕上がりまでに20～25回繰り返すことによって、ヤシャブシの実に含有するタンニンと土の中の豊富な鉄分とが化合してできたタンニン酸などの働きで、茶褐色からだんだんに黒味が増してきて、真黒な艶のある製品に仕上がるのです。

以上の工程は、昭和54年（1979）に田村氏が前出の『秋川市史研究第2号』で発表された論考によりましたが、氏の調査・研究自体は昭和29年（1954）に行われたものです。しかし、その時点ですでに調査が困難な程に、黒八丈の痕跡は無くなっていました。



座　繰

ついでながら、近年、絶えて久しい幻の郷土名産黒八丈を、現代に蘇らせた人がいます。あきる野市山田にお住まいの森　博さんです。森さんの本業は絹糸の撚糸加工ですが、本業と関わりの深い名産黒八丈を自分の手で蘇らせてみたいと思い立ったのも、自然の成り行きでありましょう。

かくして、昭和60年代から森さんの幻の黒八丈再現への取り組みが始まりました。資料をあさり、お年寄りから記憶を聞き出し、それらを頼りに秋川の岸辺の土を幾つかの箇所から採取し、近くの山林からヤシャブシの実を集めました。これらの材料を使って泥染めに挑戦し、見事に再現させたのです。

森さんは、これに「五日市染め」と名を冠し、自宅に展示室を設けて、一般に展示・頒布しておられます。

数年前、筆者も見学させてもらいましたが、単に黒色の染め方だけでなく、薄い褐色の、上品で現代感覚にも十分マッチする製品も創作しています。

4. 衰退・消滅

幕末頃から全国的に知られる名産として、秋川・平井川流域、そして多摩川沿岸の一部でも、女性の農間稼ぎの主流を占めた黒八丈生産は、明治以降も盛んに行われました。

しかしながら、完成までにたいへんな手間隙がかかる製品（染色だけでも早くて1週間、長いと20日くらいかかった）でしたから、農家の副業の域を脱して、工場で機械を動かして大量に生産するまでには至らず、やがて衰退していく運命にありました。

明治から大正、昭和という時代の流れの中で動力織機が発明され、人絹（じんけん）と称せられるような安価で大量生産が可能な製品が出回り、さらに化学薬品を駆使して比較的容易に、しかも大量に染色できるようになると、名産黒八丈の市場価値が、次第に後退していきました。

それに拍車をかけたのが、大正の終わり頃から桐生地方で盛んに生産されるようになった「人絹黒八丈」だといわれています。

人絹は人造絹糸の略で、天然の絹糸をまねた織物用繊維です。原料は綿や木材パルプで、種々の方法で含有するセルロースを溶解し、繊維化します。

染色も化学染料を補助原料に使い、わずか2昼夜で染め上げることができます。

秋川流域などでも、このような新製品の工場生産事業を新たに起こす人が現れました。反面、手間隙がかかる従来通りの黒八丈を織っていた農家も、これをやめて、養蚕を専業にするようになっていきました。

第2次世界大戦が昭和14年（1939）に始まり、戦争遂行のための物資の統制などが、年ごとに厳しくなっていきました。そして、昭和18年（1943）には国から製造禁止令が出されて、その時点で黒八丈生産もついに終止符を打たされたのです。

先日、筆者も関係する秋川歌舞伎が、都の文化財指定を受けました。そして、その指定証書が交付されましたが、証書の紙は、なんと軍道紙ではありませんか。ちなみに、あきる野市の公立小中学校の卒業証書も同じく軍道紙を使用しています。

地域に残された伝統産業の見事な復活とみてよいでしょう。

しかしながら、かつては「五日市」などともてはやされ、江戸時代後期から昭和10年代までの、およそ100～150年ほどの間、当地方の農民の生活を支えてきた黒八丈の復活は、まことに容易ではありません。森さんも、あまりに高く付いてしまうコストを嘆いておられましたが、それらを克服し、再びあきる野の地に黒八丈が華々しく復活できる日を待ちたいと思います。